ギリシア語エノクの黙示録（あらまし、簡略版）　「Barbaroi!」より抜粋

第１章

（前略）

つまり、永遠の神が地上に、セイナ〔シナイ〕山に足をつけられ、自分の陣営(parembole)から現れ、諸天の中の天から、自分の強力な軍勢の中に現れられるであろう。（中略…）大地の果てまで戦慄と大いなる恐怖がとらえるであろう。そして、高き山々は揺すぶられ、倒壊し、解体するだろう、そして高き山々は崩れて平坦な丘になり、火の前に、炎によって蜜蝋のように溶けるであろう。大地は、割れ目によって裂け目が走り、地上にあるものすべてが破滅し、万物に対して審判が行われるであろう。

ただ義人たちとだけ和平を結び、この選びぬかれた人たちには保護と和平があるだろう、つまり彼らには憐れみがあり、すべての者たちが神のものとなり、彼らには愛顧を与え、全員を祝福し、わたしたちのためにすべてを取りもどしてくださり、救助し、彼らには光を表し、彼らのために和平をつくってくださるであろう。

彼の１万人と、彼の聖なる者たちといっしょに進軍なさるのは、万人に対する審判をなすため、そうして、不敬な者たちすべてを破滅させ、あらゆる肉を、彼らの不敬の所業 — 彼らが不敬を犯したすべての所業、彼らが口にした耳障りな言葉 — すべてに関して吟味されるであろう。不敬な罪人たちが彼に対して『そしったことすべてに関しても』。

（中略）

第６章

そうして、人間どもの息子らがいや増す時になって、その日々に、うるわしくも美しい娘たちが生まれた。そこで、天の息子たちである**天使たちはこれを見て、彼女たちに欲情し、お互いに言い交わした。『さあ、人間どもから自分たちの妻を選ぼう**、そして自分たちの生子をもうけよう』。

すると、セミアザスが彼らに向かって云った、彼は彼らの支配者(archon)であった。『この行為を為すことをあなたがたが拒み、わたしひとりが大きな罪の責めを負うのではないかと怖ろしい』。

そこでみなが彼に答えた。『みんなで誓いを立て、みんなで呪いをかけてお互いに誓い合おう、この目論見(gnome)を達成し、このことを実行する時までは、この目論見を撤回しない、と』。そのとき、全員がいっしょに誓い、その場所でお互いに呪いをかけて誓い合った……

そして以下が、彼ら支配者(archon)たちの名前にほかならない。セミアザス、これは彼らの支配者(archon)であった。アラタク、キムブラ、サムマネー、ダネイエール、アレアロース、セミエール、イオーメイエール、コーカリエール、エゼキエール、バトリエール、サティエール、アトリエール、タミエール、バラキエール、アナントゥナ、トーニエール、ラミエール、アセアル、ラケイエール、トゥウリエール。

（中略）

第７章

こうして彼らは自分たちに妻を得た。彼らのめいめいは、自分たちに妻を選び出し、彼女たちのもとに通い、彼女たちによって身をけがしはじめた。そして、彼女たちに諸々の施薬、諸々の呪文、諸々の〔薬用のための〕根の採集を教え、彼女たちに野菜を明らかにした。

やがて女たちは胎に孕み、身の丈3000ペーキュスある大きな巨人(gigantes)たちを産んだ。

この者たちは人間どもの労苦をむさぼり食い、そのため、人間どもは彼らを扶養することができなくなったので、巨人たちは彼らに対して大胆にふるまい、人間どもをむさぼり食った。こうして、彼らは羽根あるものらに対して、獣に対して、這うものらに対して、魚どもに対して罪を犯しはじめ、**お互いの肉までむさぼり食いはじめ、**

血を飲んだ。
　そのとき、大地はその無法を訴えた。

第８章
　アザエールが人間どもに教えたのは、軍刀(machaira)と武器(hopla)と小楯と鎧の作り方、これが天使たちの教え(didagma)であり、彼らに教示したのは、金属とその製法、腕輪と諸々の装身具とシャドーカラーとまぶたを美しくする化粧品と選びぬかれたありとあらゆる宝石と諸々の染料であった。
　こうして多くの不敬が生じ、そうして彼らは姦淫し、惑い出て、自分たちのあらゆる道において堕落した。セミアザスは諸々の呪文と諸々の〔薬用のための〕根の採集を教えた。アルマロースは諸々の呪文の解き方を。バラキエールは天文学を。コーキエールは占いを。サティエールは星辰研究を。セリエールは月の運行を〔教えた〕。ところが、人間どもの破滅するとき、その叫び声が天まで登った。

第９章
　そのとき覗きこんだのが、ミカエールとウウリエールとラパエールとガブリエール、この者たちは天上から、おびただしい血が地上に流れているのを眼にした。地上で助けを求める者たちの叫び声が天の門までとどく。（中略...）彼らは主に云った。
　『（中略...）かくして彼らは大地の人間どもの娘たちのもとに通い、これと交わり、身をけがし、あらゆる罪をこれに明らかにしました。女たちは巨人族(titan)を生みました、これによって大地総てが血と不正に充たされました（中略...）』。

第 10 章
　そのとき、至高者がこのことについて云われた、偉大な「聖なる方」が話された、云われた、そしてラメクの息子〔ノア〕のもとにイストラエールを派遣なさった
　『わしの名で彼に云え、「身を隠せ」と、そして彼に来たるべき終末を明らかにせよ、全地は滅びる、全地に大洪水が起こることになり、そこにあるものはすべて滅びるであろう、と。そして彼に明らかにせよ、脱出するよう、そしてその種子(sperma)を永遠の全世代にとどめるようにと』。
　またラパエールにも云われた、『アザエールの両手両足を縛れ、そしてこれを闇の中に投げこめ、そしてダドゥウエルにある荒野を開き、そこにこれを投げこめ、（中略...）そうして大いなる審判の日に、〔アザエールは〕燃えさかる火の中に引きずりこまれよう。・・・かくして、全地は荒野と化すであろう、アザエールの教えの業のせいで。そしてすべての罪を彼のせいにせよ』。

（中略）

第 12 章
（中略）
　そしてわたしヘノークは、偉大さの主、永遠〔複数〕の王をほめたたえて立っていた。すると、見よ、偉大なる聖なる者の覚醒者たちがわたしを呼んだ。
　『ヘノークよ、正義の律法学者よ、行け、そして云ってやってくれ、天の覚醒者たちに — 天の至高者、永遠の叛乱の聖所を見捨て、女たちと身をけがし、大地の息子たちのように、そのようにみずからも為し、自分たちの妻を娶った連中に。「おまえたちは大いなる堕落で大地を台無しにした、だから、おまえたちには平安はもとより、赦罪もないであろう」と。そして彼らが喜ぶ自分たちの息子たちについても、
　「彼らの愛する者たちの殺戮を眼にし、自分たちの息子たちの破滅に呻吟し、永遠に縛られるであろう、そして

彼らには憐れみや平安を受けることはないであろう」と』。

第 13 章

そこで、ヘノークはアザエールに云った。

『行け。おまえに永安はあるまい。おまえを縛れという大いなる審判がおまえに対して下された、寛恕も代願(erotesis)もおまえにはあるまい、おまえが教えた不正事についても、不敬な業のすべて、不正、罪、これらおまえが人間どもに教示したことについても』。

そのとき、わたしは行って彼ら全員に云った、すると彼らはすべて恐怖し、戦慄と恐怖が彼らをとらえた。

そして、自分たちのために代願(erotesis)の覚書を書いてくれるよう〔ヘノークに〕頼んだ、（中略...）

そのとき、わたしは彼らの代願(erotesis)の覚書と祈願(deesis)を書きあげた、彼らの霊について、また彼らが縛られる事柄について、彼らの赦罪と執行猶予が生じるようにと。

（中略）

第 14 章

（中略）

わたしは汝ら天使たちの代願(erotesis)を書いた、そしてわたしの幻のなかでは、それは示された。だが、汝らの代願(erotesis)は受け取ってももらえなかった、（中略...）

また幻によってわたしに次のように示された。見よ、群雲が幻のなかで呼び、霧がわたしに声をかけ、星辰の軌道と稲妻がわたしを急き立て、わたしをかき乱す、諸々の風もわたしの幻のなかでわたしを吹き飛ばし

わたしを上へ引き上げ、わたしを天の中に運びこみ、わたしは霰の石〔"lithoi chalazes"=水晶〕で建てられ、そのぐるりを火の舌で囲まれた城壁の近くまで入っていった。そして恐怖の念がわたしにおこってきた。

そうして火の舌をくぐって入り、霰の石で建てられた大きなその館に（中略...）わたしは入っていった、（中略...）恐怖がわたしをつつみこみ、戦慄がわたしをとらえた。そのためわたしは震えおののいていた、
そして身をなげだした。わたしの幻のなかでわたしは見つめた、

すると、見よ、別の扉が開いていて、
わたしの向かい側に、これよりもっと大きな館があった、すべてが栄光の点でも名誉の点でも偉大さの点でも抜きん出ているあまりに、わたしは汝らに、それの栄光についても偉大さについても言い尽くすことができないほどである。さらに、わたしは見つめて、高い王座を見た、（中略...）

そして大いなる栄光がそこに座していた。その外套は太陽の姿のよう、どんな雪よりも輝かしく白い。

（中略）

わたしは、そのときまで、わが顔を覆って、ふるえていた、すると主がその口をもってわたしを呼び、わたしに云った、『こちらへ近く寄れ、**ヘノーク**よ、わが言葉を聞け』。

すると、聖なる者たちのひとりがわたしに近づいてきて、わたしを起ちあがらせ、わたしを立たせた、そうしてわたしを王座のところまで連れて行った。しかし**わたしはわが面を伏せてうつむいていた。**

第 15 章

すると〔聖なる者が〕答えてわたしに云った。

『真実なる人間、真理の人、律法学者よ』。すると、あの方の声をわたしは聞いた。

『**怖れるな、ヘノークよ**、真実なる人、真理の律法学者よ。ここへ近く寄れ、そしてわしの声を聞け。行って、おまえを遣わした者どもに云え、「執り成しをしなくてはならぬのは、おまえたちが人間どものためにであって、人間どもがおまえたちのためであってはならぬ。何ゆえおまえたちは、永遠の聖なる高みである天を捨てて、女たちと同衾し、人間どもの娘たちと身をけがし、自分たちの妻に娶ったのか？　おまえたちは大地の息子たちのよう

にふるまい、自分たちの生子、巨人の息子をもうけた。
　おまえたちも聖なる者にして永遠の生きる霊であったのに、女の血によって身をけがし、肉の血によって生み、人間どもの血において欲情した。自分たち自身も肉と血となったかのように、〔彼ら=肉と血は〕死ぬ身であり、滅びる者たちである。
　それゆえ、彼らには牝を与えた、それ〔=牝〕に種まき、そういうふうにそれによって生子を出産するため、地上における彼らの業がすべてなくならないためである。これに反し、おまえたちは、永遠の生きた霊であり、永遠の全世代にわたって死ぬことはない。
　それゆえにこそ、わしはおまえたちには牝をつくらなかった。諸々の霊は天に属し、天が彼らの住処である。ところが今や、巨人たち、霊と肉から生まれた者たちが地上にあって強力な霊となり、彼らの住処は地上にある。（中略…）天の霊たちは、天にその住処があり、地上に生まれた霊たちは、地上にその住処があることになろう。

第 16 章

（中略）

「おまえたちはかつて天にあった、そしておまえたちに開示された秘義をすべて、神から与えられた秘義をおまえたちは知り、これをおまえたちの心の頑なさゆえに女たちに漏らし、この秘義によって牝たちや人間どもは生子を地上にはびこらせた」。そこで彼らに云うがよい。「平安のあることなし」と』。

第 17 章

〔天使たちは〕わたしを引き取って、ある場所に連れて行った、（中略…）わたしは見た、大地にあるすべての河川の口と、底なしの深淵の口を。

第 18 章

（中略）

天使が云った、『これは天と地の終わるところ。これは星たちと天の権能者たちとの牢獄である。
（中略…）〔神が〕彼らに怒られ、これを縛られたのである、彼らの罪の完了の時まで、その期間は、1 万年間である』。

第 19 章

さらにウウリエールがわたしに云った。
「女たちと交わった天使たちはここに立たされるであろう、そして、彼らの霊たちはさまざまな形をとって人間どもをけがし、精霊たちに供儀するようこれを惑わすであろうが、それも大いなる審判〔の日〕までのこと、その日に裁かれて終わるであろう。
（中略）
これらの光景を、万事の果てを見たのは、わたしヘノークだけである、人間たちのうちひとりとして、わたしが見たように見たものは決していない。

第 20 章

軍団の天使たち〔は以下のとおり〕。
ウウリエール、聖なる天使たちのひとり、世界と奈落に〔配置されているもの〕。
ラパエール、聖なる天使たちのひとり、人間どもの霊たちに〔配置されているもの〕。
ラグウエール、聖なる天使たちのひとり、光輝くもの(phoster)たちの世界に復讐するもの。
ミカエール、聖なる天使たちのひとり、民人の善きものらに配置されている、また混沌を〔つかさどるもの？〕。

サリエール、聖なる天使たちのひとり、霊に対して罪を犯すような霊たちに〔配置されているもの〕。

ガブリエール、聖なる天使たちのひとり、楽園と竜たちとケルウブたちとに〔配置されているもの〕。〔以上が〕天使長たち７人の名前である。

〔ここには６名の名前しかないが、別の写本には、「レメイエール、聖なる天使たちのひとりで、神はこれを反抗者たちに向けて配置した」とある。〕